

稚児が淵 ちご ぶち

江戸時代のころのことです。高間木の辺りにお千代さんと呼ばれた働き者の娘さんが住んでおりました。

お千代さんの家は小高い丘の上にあり、まわりに柿の木がたくさん植えられており、村人はここを柿平と呼んでいました。この辺りは昔日光街道の裏道として人々の往来があったところでした。時には、参勤交代や江戸の諸大名などが日光東照宮などに詣でる際に、代々士族であったお千代さんの家の一夜の宿をとることがあったということでした。

お千代さんは毎日着物のつくろいもののかたわら、宿泊客の食事の世話など一切を任せられていました。

江戸から日光東照宮に向かう大名の一行が宿をとった時のことでした。お千代さんは、お殿様の食事の準備でいつになく気を配り、夕食づくりに励みました。日も暮れかかっ



たころやっとお殿様の御膳ができあがりしました。

お千代さんの父である当家の主人は、

「お千代や、お殿様の御膳じや。粗相のないよう頼みますよ。」

と、一言だけ告げました。いつものこととはいえ、今日の客人はお殿様ということ、さすがのお千代さんも上気したほほをほんのり赤くしながら、御膳をお殿様の前に差し出したのです。

「世話になるのう、娘さん。名は何というのじや。」

と、お殿様は上機嫌でした。

「ハイ、千代と申します。お殿様のお口にお合いになりますかどうか。どうぞ、ごゆつくりお召しあがりくださいませ。」

といいながらお殿様の接待を努めたのでした。

ところが、食事半ばになったころ、突然お殿様の顔がきびしくなり、お千代さんを睨みつけました。家臣の一人が驚いてお殿様の御膳の茶わんを覗き込み、顔をひきつらせながら、

「これ娘、何としたことか、殿の御膳に縫い針を入れるとは！ 無礼者めが。主人を呼

べ、主人を！！」

と激怒しました。お千代さんは一瞬何事がおきたのかと驚きのあまり、ただただおろお

ろするばかりでした。しかし、すぐにことのしだいがわかると、

「申し訳ございません。」

蚊の鳴くような声で一言いうのが精一杯でした。

やがて、これを聞きつけた当家の主人はお殿様の前にひざまずき、

「娘が、お殿様の御膳にとんでもないご無礼を

いたし、誠に申し訳ございません。」

深々と頭をさげながら、

「娘は目頃着物などのつくろいをしております

ので、胸元に刺しておいた縫い針を誤って落とし

てしまったのでございます。他意はございません。

されど、あやまちとは申せあまりのご無礼、ご

立腹とあらばいかようにもご処置くださいませ。」

と、娘をかばいながらも丁寧に謝罪をいたしました。

すべてを目のあたりにしたお千代さんは、

「お殿様、取り返しのかねことをいたしました。どうぞ、わたくしを、この場でお



稚児が淵

手討ちにしてくださいませ。」

とお殿様の前に進み出ました。ことの様子をじつと見つめていたお殿様は、あまりにもしおらしく、素直な千代さんの姿に痛く心をうたれ、

「これ、お千代、もうよいぞ。子細を改めもせず、わしが悪かった。あやまちには誰にでもあるものじゃ。よい、さがってよいぞ。これからもよろしくたのみますぞ。」

と仰せられ、その場はことなきを得ました。

その夜、主人は強くお千代を叱ったが、やがて気を取り直し、

「お千代や、済んでしまったことだ。それに、お殿様もお許しく下さったことゆえ、あまり気にせず、しっかりやっつくれ。」

と励まし、慰めたのでした。

このことがあってから明るく陽気だったお千代さんは、人が変わったように無口になり、人前に出ることがなくなり部屋に閉じこもる日々が多くなりました。

それから数か月たった夕暮れのことです。お千代さんは一人裏山づたいの鬼怒川に面した崖の上に立っていたのです。

「父上、わたしは本当に愚かなことをしてしまい、我が家に汚名を残してしまいました。何とお詫びをしてよいものか、お許しく下さい。」

つぶやきながら、空ろな眼差しで夕焼けに染まった川面を見つめていたのです。

その後、お千代さんの姿を見た者は誰一人としていなかっただと。このことを知った村人たちは、誰いうことなくこの淵をお千代が淵と呼ぶようになり、後にお千代さんの父は、わが子お千代のあまりにも不憫な生涯を哀れみ、近くの丘に神社を建立し、お千代さんの御霊を祀ったのでした。

月日が過ぎ去ったある年のことです。世の中は未曾有の大飢饉になり人々は、その日の食料にも事欠く日々が続くようになりました。作物も思うように実らず、苦しい生活を強いられたのです。

「このままだと、親子ともども干乾しになっちまうべや。」

日増しに苦しくなる暮らしに難儀をしていました。そんな折、ある家の嫁が身籠もったのでしたが、家族の者は、喜ぶどころか、

「これ以上家族が増えては、おまんまがたりなくなってしまうべよ。」

と悩み続けるありさまでした。

やがて、その嫁に子供が生まれましたが、若い夫婦はまだ名もなく、目も開かぬ赤子を抱き抱え、お千代が淵に向かったのでした。

「かんべんしてくれや、かんべんしてくれや、天国でお千代さんに面倒見てもらえ、たっしやでなあ。」

我が子の不憫に涙に暮れ、夫婦は、じつと鬼怒川の淀みに目をやりながら、日がとつぷ

り暮れてもその場にひざまずき、去ろうとしなかつたのです。

その後、このお千代が淵には何組もの同じような姿が見られたということです。

以来、村人たちは、この淵を『稚児が淵』と呼ぶようになったということです。

今でも、この淵に立ちますと、遠い昔のお千代さんや赤子たちのすすり泣きが、聞こ

えてくるように思われてならないのです。